

関西大学における高大連携の試み

—Kan-Dai ネットレス・セミナーの実践内容とその成果—

【発表者】 小林 至道（関西大学・教育推進部）

1. 問題の所在

高大接続の問題は、初年次教育研究において重要な課題の一つとされている（杉谷 2011, 川嶋 2013 など）。山田によれば、高校から大学への円滑な移行を支援する初年次教育は、「学力低下に備える」だけではなく、「動機づけの欠如を補う」効果も期待されているなかで、「大学で初めて新入生のために行う教育」として位置づけられてきた（山田 2011, p. 39）。そこでは、大学での学習に不可欠な「レポートの書き方」、「論理的思考力や問題発見・解決能力」、「口頭での発表技法」などが重視されることが、これまでの調査で明らかになっている（山田 2009, 文部科学省 2009 など）。

その一方で、「論理力、問題発見、解決力といった目標に向けての教育方法として効果的だとされるディスカッションや口頭発表の機会あるいは、探求型レポートなどを書く機会」は限られており、この点における高等教育と中等教育との接続性はあまり見られない（山田 2011, pp. 38–39）」と指摘されるとおり、大学で行う上記のような授業実践を前倒しして高校生を対象に行う事例やその成果の蓄積があまりに少ない、というのが現状である。

このような背景を踏まえて、本発表では、関西大学教育推進部¹が「アクティブ・ラーニングで大学生の学びを体験してみよう！」というテーマのもと、2013 年度に実施したネットレス・セミナーにおける授業実践の内容とその成果を報告する。

2. ネットレス・セミナーの概要

（1）ネットレス・セミナーとは

ネットレス・セミナーは、2007 年度より関西大学において実施されている高大連携の取り組みである。「一つ一つのテーマはネットレスのようにつながる」という企図が、セミナー名の由来となっている。

例年、会場である関西大学千里山キャンパスに最長でも 1 時間から 1.5 時間程度で来校できる距離内の高校へ、前年度の 2 月（今回の場合は 2013 年 2 月）頃から、郵送での案内文の配布を開始する。そして、各高校が参加希望者を取りまとめて受講申込書を返送することで、受講資格が得られることになる。

2013 年度は、春学期（5～6 月開講）に教育推進部とシステム理工学部が、秋学期（10～11 月開講）には法学部とシステム理工学部がそれぞれにテーマを設定し、全 6 回の講義を行うことになっている。なお、本セミナーの案内については、関西大学 HP 上にも掲載されている。

（2）参加者の内訳

2013 年度の春学期に教育推進部が実施した同セミナーには、79 名（大阪、京都、奈良、兵庫から 12 校）の高校生が参加した。参加者は全 6 回同じメンバーで、その内訳を学年別に見ると、1 年生＝42 名、2 年生＝23 名、3 年生＝14 名、全体で見ると、男子＝36 名、女子＝43 名であった。

（3）授業スケジュール

本実践の特徴の一つは、表 1 のとおり、全

¹ 教育推進部とは、関西大学の教育活動全体を支援する組織で、共通教養教育の推進や教育開発などを行っている。

6回の授業を分担制で行った点にある。全6回を通してつながりのある授業を提供するために、各回の授業案、レジュメ、スライドなどの資料は、担当者間で情報を共有した。

表1 授業スケジュール

回	日程	テーマ	担当者
1	5月25日	わかりやすい文章を書く	林田
2	6月1日	読解力を身につける	小林
3	6月8日	論理的に考える	中澤
4	6月15日	プレゼンテーション入門	岩崎
5	6月22日	ディスカッションでアイデアを練る	西浦
6	6月29日	ディベートで議論する力を身につける	中澤

【時間】毎週土曜日 14:40～16:10 (90分)

(4) 授業設計における狙い

①ライティングに関わるテーマ設定

本実践は、津田塾大学との大学間 GP、〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援(2012年度採択文部科学省大学間連携共同教育推進事業)の一環としての取り組みでもあることから、そこでの研究活動と関連づけたテーマ設定となっている。

②アクティブ・ラーニング形式の授業

また、近年の大学教育におけるトレンドを鑑み、生徒が一方的に講義を聞く形式ではなく、積極的に授業に参加し、主体的に学ぶことができる授業形式としたことも、本実践の特徴の一つである。具体的には、毎回の授業において個人ワークあるいはグループワークの時間をふんだんに(約30分～60分)盛り込んだ授業設計とした。

このアクティブ・ラーニング形式の授業をより円滑に実現するために、毎回3～5名の学部生をラーニング・アシスタント(LA)として配置した。LAの主な業務は、授業前の打ち合わせ・準備、当日資料の配布、グループワークの補助、授業後の片付けなどである。

3. 分析課題

以上のような取り組みを通して、本発表で

は、次の2点を主な分析課題として設定する。

- (1) 高校生の受講の様子
- (2) 授業設計における狙いの効果検証

まず、(1)については、特に高校における通常の授業とは異なる点、すなわち、90分という授業時間、多様なテーマによるグループワーク、他校の生徒との交流といった点に着目し、実際の高校生の受講の様子を検討する。

次に、(2)については、①授業担当者を分担制とした点、②アクティブ・ラーニング形式の授業を行った点が、実際の受講者である高校生および講義を行った教員それぞれにおいて、どのように受け止められたのかを分析課題とする。

分析は、本セミナーの各回におけるアンケート(出席票代わりに各生徒が回答)、および全6回が終了した後の受講者アンケート、そして各回の授業担当者が回答した事後アンケートの結果にもとづいて行う。なお、本発表要旨の提出時点(6月17日締切)では、未実施の回を含む現在進行形の試みであるため、上記の分析結果および考察については、当日の発表にて詳しく報告する予定である。

【参考文献】

- ・川嶋太津夫(2013)「高大接続と初年次教育」初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』世界思想社、pp.43－54.
- ・文部科学省(2009)「大学における教育内容等の改革状況について」.
- ・杉谷祐美子編(2011)『大学の学び 教育内容と方法』玉川大学出版部.
- ・山田礼子(2009)「大学における初年次教育の展開ーアメリカと日本」『Journal of Quality Education Vol. 2』国際教育学会、pp.157－174.
- ・山田礼子(2011)「大学からみた高校との接続ー教育接続の課題ー」『高等教育研究第14集』日本高等教育学会、pp.23－46.